

## メッセージアウトライン 詩篇23：1～6「主は私の羊飼いです」

### ダビデの賛歌

有名な説教者であったC・H・スボルジョンはこの詩を「詩篇の中の真珠」と呼んだ。短い詩であるが、美しい神への信頼を歌っている。

[1]「主は私の羊飼いです。私は乏しいことはありません」

ここで「羊」はダビデによって代表される信仰者、「羊飼いです」は主なる神のことを指す。羊は弱い動物。しかしこの羊の牧者は主なる神なのである。イスラエルの歴史を通して主が牧者であった時、彼らは乏しくなかった。→申命記2：7

[2]「主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」

羊飼いは羊を死の危険に満ちた荒野から青々とした牧草の茂る牧場に導き入れてくれる。そしてそこに「伏させ」すなわち休ませて、周囲の危険からも守ってくれる。

「いこいの水」…水は生命を維持するもので不可欠なもの。このことばは神の物質的、霊的な豊かな祝福をあらわす。神が与えてくださるあらゆるものがここに含まれている。

「伴われる」…導く。意。羊は羊飼いに導かれていく時、このようないのちと平安が与えられる。

[3]「主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます」

羊は飢え渴いている時、羊飼いですによって食物や水が与えられ、生き返ったようになる。主は同様にダビデを敵から守り、救い出し、良きものを与えてくださることによって、彼のたましいを生き返らせてくださる。「御名」とは神ご自身を表わすことば。主はご自身の御名のゆえに、ご自分の羊を間違いなく守り、義の道に導いてくださる。「義の道」とは神の救いと正義が現される道、力と活気と平安が与えられる道のこと。

[4]「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませぬ。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです」

イスラエルの地には深い谷があり、猛獣がそこに潜み、しばしば羊を襲った。私たちの人生においてもしばしば死の陰を谷を歩くような経験がある。しかし、ダビデはわざわいを恐れない。それは彼が主により頼み、主がともにいてくださったからである。

「むち」…ここでは先に鉄の金具がついた棍棒のこと。野獣を追い払ったり、戦ったりする時に用いられた。「杖」…曲った柄のついた杖。羊を数える時や体を支える時に用いた。もちろん戦いの時にも。これらの物によって牧者は羊を守る。そしてその守りが羊を慰めるのである。

[5]「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています」

ここでは客をもてなす主人のたとえに変わる。主は敵からダビデを保護するだけでなく、豊かなふるまいをもって彼を扱われる。

[6]「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追ってくるでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」

「主の家に住む」ということは、主とともにいることであり、そこで礼拝をし、賛美をし、交わりをし、様々な恵みにあずかるということである。信仰者の最終目標は、もはや何ものにも煩わされることなく、主を礼拝し、賛美し、とこしえに主とともにいることなのである。→黙示21：1～5

私たちも人生において死の陰を歩くようなことがあっても、主なる神こそ私たちの真実の牧者であることを覚え、信仰をもってこの地上の歩みを一日一日全うしていく者となりたい。

この一年の守りと導き、祝福を主に心から感謝しましょう。